

*Confirmation of salvation*

救いの確証

Revival Booklet Series No.20



リバイバルシリーズ No.20

麻生 茂



SUNRISE MINISTRY



## 救いの確証

.....

救いとは何か？どうなることか？どうして自分のものとするか？

手探りの状態にあるあなたに、神によって生命の書に名が記され、確信をもって喜びにあふれて歩む道を示すメッセージ。

“救い”という言葉は聞く人によってそれぞれ違った意味に解するでしょう。間違った生活＝大酒・賭博・不品行・不和・争い＝からまじめな生活に変わること  
も救いなのです。失意失望の生活＝病氣・貧困・失業・悲しみ・苦しみ＝から解放されることも救いに違いないのです。

しかし私がこの本の中で言おうとしているのは、こうした比較的小さな“救い”ではなく、もっと大きな世界的・恒久的・永遠的な救いがあります。しかもこの救いはあなた個人を見事に救いあげ、あなたをして、喜びに躍り上がらせ、その救いの結果としてあなたを正しい生活に導き、悲しみ苦しみから全く解放してくれるのです。

キリストの救いとはこういう素晴らしいことをしてくれる宗教なのです。どうぞ心を落ちつけて静かにお読みになって下さい。

日本が生んだ世界的宗教学の権威に東京大学教授だった故岸本英夫博士があります。

博士は欧米の有名大学の交換教授として招かれ該博な知識を普及していたのです。カリフォルニアの名門校スタンフォード大学で交換教授として宗教学を講じ

ていた時、不幸にも、不治の癌に侵され闘病十年、ついに逝かれたのです。

岸本博士は追い迫る死と勇敢に戦い、最後の瞬間まで克明に、率直に、少しの飾るところもなく、思った通りを記録なされたのです。名著“死を見つめる心”がこれです。

岸本先生はこの遺書の中に、死期の迫っていることを告げられた時の感慨を、次のように書いておられるのです。

“私は今さらながら人間の生命への執着の強さを知った。ひとたび生命が直接の危険にさらされると、人の心がどれ程たぎり立ち、たけり狂うものであるか。そしていかに全身の細胞の末に至るまで必死でそれに抵抗するものであるか。……それは身の毛のよだつ恐ろしいことであった。絶望のほか何ものもなかった。……そして痛烈な痛みを感じながら、私は死をじっと見つめているよりほかなかった。夜が来ると身も心もへとへとに疲れ切っていた。ベッドに横たわるともう手も足も動かすことが出来なかった。それは、はなはだしい精力の消耗であって、ただ冴えているものは頭だけであった。”

岸本博士は、自分を死刑宣告された囚人、防空壕に息をひそめる恐怖の人に擬して、死との激しい対決をお書きになったのです。

人間にとって絶対に逃れられない事が一つあります。それは“死”であります。どんな人間にとっても一番恐ろしいのが“死”で、この“死”と対決する時には心から恐れすくんでしまうことのない者は一人だってありません。この世の中には、どんな人間の努力をもってしても、この死の恐怖を征服し得るものは何一つありません。死は絶対的な独裁支配者で、死の声を聞く時、私たちは一様にどんなに辛くても悲しくてもその厳しい過酷な運命に泣く泣く従うしかないのです。ところがここに、たった一つ、この恐るべき死の運命に敢然と立ち向かって見事に勝利させてくれる力があるのです。これがキリストなのです。

「キリストがどのようにして死に勝利したのか。キリストを神の子と信じる者がどのように死に勝つことが出来るか」ということを詳しく述べてあるのが聖書なのです。聖書の中には、『キリストがどのようにして死すべき運命にあった私たち人間を死なずにすむ人間とし、また永遠の神の国に住まわせて不朽の生命をお与えになろうとしているのか』ということが記されているのです。“救い”とはまさにこの“死”に勝利して神

の国に救われるということなのです。

## 人の死と神のさばき

.....

「そして、一度だけ死ぬことと、死んだ後さばきを受けることが、人間に定まっている……」（ヘブル人への手紙 9：27 参照）。

この神の御言葉は私どもに二つの厳粛なことを教えてくれます。

一、 だれにでも必ず死が臨むということ。

二、 人は死んだ後に、人を創られた神によって必ずさばきを受けねばならないこと。

「さばき」という言葉はけっして快い響きをもった言葉とは言えません。むしろ不気味でさえあります。まして死後、神によってさばかれることを聞く時、少なからず心に動揺を感じます。

多くの場合、私どもは死やさばきの事を考えません。いや、考えたくないのです。しかし、私どもがどう考えようが、キリストがお教えになったように、人は死に、

神のさばきは必ず行われるのです。聖書がそれを裏書きし、正義を求める私どもの良心と理性がその必要を納得するのです。

“神は、おのおのに、そのわざにしたがって報いられる。すなわち、一方では、耐え忍んで善を行って、光栄とほまれと朽ちぬものとを求める人に、永遠のいのちが与えられ、他方では、党派心をいだき、真理に従わないで不義に従う人に、怒りと激しい憤りとが加えられる。”（ローマ人への手紙 2：6-8）

もし本当に宇宙の創造主である神がおいでになるのであれば、こうなくてはならないと考えるのです。フランスの有名な無神論者ヴォルテールが彼の著書の中に、“神が存在しないなら人は神を創るべきだ。”と書いていますが、そう思います。

神はどんなふうにも人をおさばきになるか。聖書にはかなり詳しく記してあるのですが、たとえば言うと、すべての人の生活の明暗を克明に記録したビデオテープのようなものをお使いになるのではないかと思います。（ダニエル書 7:9, 10、ヨハネ黙示録 20:12-15 参照）

アメリカの歴史に大きな汚点を残したウォーターゲート事件の責任を負わされて、実に多くの政府高官

が監獄に投げられました。

大統領ニクソン氏は最後まで自分の責任を逃れようとしたのですが、ついにとどめを刺されたのは、予期しなかったホワイト・ハウスのオパール貴賓室の壁に取り付けられていた自動テープ・レコーダーに記録された自分自身の声だったのです。

人間でさえ自分の日々の行動をくまなくテレビやテープに残すことができるのでしたら、全能の神にこれ以上のことが出来ないはずがありません。

私どもがどんなに無罪を言いはっても、動かない証拠物件を持ちだされたらグウの音も出せないでしょう。

神の人へのさばきはあります。なくては神でなくなります。人のみに神が良心を与えているのはこのためです。

そうすると、このさばきについて私どもには次の四つの疑問が起こってきます。

第一に、神はどういうふうになをさばかれるのだろうか。

第二に、さばきとは一種の試験なのですから、入学

試験や就職試験のように提出される問題について前もって研究する必要がありませんか？

第三に、もしこの神のテストに合格しなかった場合、人はどうなるのでしょうか？

第四に、なぜ、愛の神が人間にこんなテストをして、神の国に入れる者と入れない者とにふるいをかけて分けてしまわれるのでしょうか？神の愛は母のそのように悪い人間ほど可愛くて、良きにつけ悪きにつけなんでも受け入れて下さる大きな慈悲と言えないのでしょうか？

まず最後の質問からお答えしましょう。

キリストの父なる神は愛の神であられるが故に、このテスト（さばき）が必要なのです。創世記第一章は「はじめに神は天と地とを創造された……」というダイナミックな言葉から始まっています。神は毎日、光、水、空気、地、海、魚、動物、鳥、昆虫、爬虫類、家畜、……そして人間という順序にお創りになりました。そして第1章の最後の31節を見ると、“神が造ったすべての物を見られたところ、それは、はなはだ良かった。”とあります。

「はなはだ良かった世界」をいつまでも立派で素晴ら

しい場所として維持していくために、神はご自分の代表として人間にこの地球の管理と支配をお任せになったのです。しかしどうしたことか、人はこの地球の管理に重大なる誤りを犯し、支配に失敗してしまったのです。そして創造の時には大変立派だった神の世界は、今日ではごらんのとおりの地獄とも言えるような犯罪や公害がみちあふれ、『ノーモア・ヒロシマ』の人類の悲願もむなしく、いつ核戦争が起こるかもわからない恐ろしい不安な世界へと変えてしまったのです。

どうしてこんなことになってしまったのでしょうか？

それは人間が神に与えられた支配権を間違っ用いて、世界の創造者であられる神への服従を捨てて反逆したことから、悲劇がはじまったのです。

新約聖書ローマ人への手紙第5章12節でこれを次のように説明してあります。

“このようなわけで、ひとりの人によって、罪がこの世にはいり、また罪によって死がはいってきたように、こうして、すべての人が罪を犯したので、死が全人類にはいり込んだのである。”

ここに書いてある “罪” という言葉は、人間の神へ

の反逆 — 神を神として認めない人間の不信な態度、神の戒めを無視して勝手放題の自分本位な生活をすることを指すのです。

神の権威を見失った者は、当然の結果として人間同士が相争うようになってしまいました。親が権威を失えば、子供たちが争うのです。有史以来、少なくとも六千年にわたって人類は互いに憎しみ、病み、争い、戦い続け、今日ではついに核戦争にまで発展して、ボタン一つ押して地球を全滅に追い込んでも、自分たちの強欲な主張を押しとおそうと身構えて私たちをふるえあがらせています。それは考えただけで血の凍る思いがします。どうして「はなはだ良かった世界」がこうなってしまったのか？恐ろしいのは人の罪なのです。人は神から与えられた永遠の生命を自分から捨てて、死すべき者になってしまいました。そして死に伴うあらゆる苦しみ、悲しみ、痛み、病などが洪水のように押し寄せてくるようになりました。

人間は自分の身を守るための激しい生存競争の結果、今日のような「地獄の様相を呈する世界」にしてしまったのです。

神の嘆きは非常に大きなものでした。神は、すべての人間の苦悩の解決は、人間が神への反逆をやめて、

神の愛のふところにかえって行くことであると教えるため、ひとり子のキリストをこの地上に降して、人間を説得する役をお与えになったのです。

今から二千年前、キリストが神の国のみ位をお捨てになって、ユダヤの国に一人の人間としてお生まれになったのは、実に神のこの“救い”を宣べ伝える平和の使者としてだったのです。

まず私たちが心にとめなければならない一番重要なことは、今のような人間の不法行為を神はいつまでも放任してはおかれないということです。聖書はきわめてはっきりと、いつか、それも近い将来に、この人間の乱行に終止符を打って、地獄のような世界を今一度もとのなほだ良かった完全な世界に回復する、と宣言しているのです。

これを「世の終末」と「キリストの再臨」と言います。そしてこれが今まで述べてきた「神のさばき」なのです。神様は創造の時のような天国に回復させた世界を、今度こそ二度と再び地獄に戻さないご決心なのです。

もし「神は愛だからだれもかれもテストなしにすくうべきだ」と言うことが真実だとして、それが実現したらどうなるでしょう？

あの権勢欲のシンボルともいわれたヒトラーやスターリン、シーザーや、ナポレオンなどが、無条件で神の国に迎え入れられたら、この新しい世界は、いったいどうなると思いますか。またまた、今日のような恐怖に満ちた世界が再現して、永久に人類は平和も喜びも味わうことが出来なくなってしまいます。もしこれが神のご計画でしたら、私はもう今からそこに行くことを神様にお断りしておきます。ですから、神は、この新しい神の国をお造りになる前にまず、テストによってふさわしくない者を天国から除く方法をおとりになるというわけなのです。神が愛だからこそきびしいテストが不可欠なのです。

キリストの再臨はこのことを実現するためのものなのです。

ではどんなテストなのでしょう？第一と第二の質問と一緒に答えましょう。キリストは新約聖書マタイによる福音書5章48節に、このテストについて、こうまとめて教えました。

**“それだから、あなたがたの天の父が完全であられるように、あなたがたも完全な者となりなさい。”**

山上の垂訓の結論がこれです。今度出来る神の国は

完全無欠、最初のはなはだ良かった世界よりももっと立派な国だから、そこに入る者には、神のような100%の完全さが求められている。これは本当に当然な要求といえるのですが—しかし、実は私は最初これを見た時ギョッとしたのを今でも覚えています。なぜなら私は、どう考えても「神の完全さ」どころか、人間的円満さにも、成熟さにも欠けているような人間なので。どんなに奮励努力しがんばったとしても、とうていこのテストには歯が立たないことを知ったからです。それで私はクリスチャン信仰を放棄しようかと真剣に考えたことさえありました。私は長い間、多くのまじめな求道者たちと同じようにキリストのこの求めた「信仰的理想」と悲しき「現実の自分」とのジレンマにおちいって大変苦悩しました。

そのころをふり返ってみますと、全く信仰の喜びは姿を消し、「救いへの確信」を持つどころではありませんでした。そしておまけに、この世界にこうした完全な人が一人でもいるものだろうか—と考えて、他の人々を観察して、というよりはアラ探しをして、あの人よりはまだ私の方がましだなどと安心感を覚えたりしたものでした。それは、今思ってもそら恐ろしいパリサイ偽善、さばき精神だったのです。こうした中途半端な微温進行状態で教会出席も義務的という惰性信

仰から、突如天から降ってわいたようなよろこびに躍動する信仰革命が私に訪れたのです。

ある日、私はヨハネの黙示録を読んでいるうちにそれまで気づかないでいた非常に重大な啓示に気がついたので。

“その後、わたしが見ていると、見よ、あらゆる国民、部族、民族、国語のうちから、数えきれないほどの大ぜいの群衆が、……御座と小羊との前に立ち、大声で叫んで言った、「救は、御座にいますわれらの神と小羊からきたる」。”(ヨハネの黙示録7:9, 10)

この光景はパトモスの孤島に、信仰のため流されていたキリストの愛弟子のヨハネが、幻の中で神の国に救われて天国の門をくぐってゆく人々を神によって見せられた時のことを記録したものです。

私はこの聖句を前にして、思いました。一体この世界中の隅々から天国の門をくぐって救われることのできるこのような多くの人々とは、誰なのだろうか？この誰も数えられないほどの大勢の人々は、キリストのおっしゃった「神の完全さ」をみんな身につけた人々なのだろうか？どんなに偉い人間たちなのだろうか？どうしてこのように天国の門をくぐる資格が与えられ

たのだろうか？私にはなぜこれが出来そうにないのか？いろいろと長い間考えに考えたのです。そしてさらに私は信仰の幻の翼を広げて、天国の門を歩いてゆく大勢の人々の顔を望遠鏡でよく見た時、本当に躍り上がる程の喜ばしい大発見をしたのです。

— 私は大勢の真珠の門を歩いて行く救われた人々の中に、キリストと一緒に十字架に架けられた強盗死刑囚の姿を真っ先に見出しました。（ルカによる福音書 23：42, 43 参照）

— 私はエリコの町で強欲非道で名の通ったローマ政府の税吏長ザアカイの喜びに満ちた顔を見つけました。（同 19：1-9 参照）

— 私は七つの悪鬼につかれました。知らぬ者のないエルサレムの売春婦マリヤの喜びに輝いた顔も彼らの中に見たのです。（同 8：2 参照）

この他、私が試験管だったらゼロにする、神を拒み良心を悲しませたサムソン（ヘブル人への手紙 2：23 参照）、姦淫殺人の大罪を犯したダビデ（詩篇 51：3, 4 参照）、こういう人々が、嬉々として天国の門をシュロの枝を打ち振りながら歩いて行くのを見た時、「ああ、私もこの中に入ることが出来る。」と叫んだのでした。

“救いは神とキリストから来る。” 私は改めて神とキリストのお恵みに衝撃を感じたのです。

私は、それまでキリストがお求めになった「完全さ」は、自分の努力で築き上げなければならないものと、大変な思い違いをしていたのでした。そうではなく、「神の完全さ」は神とキリストから与えられるものだったのです。

“キリストを神の子、罪よりの救い主と信じることによってすべての罪が赦される。” ということは知識としてはちゃんと理解していたはずだったのですが……。それがいつの真にか「自分の道徳善行によって罪が赦される」という律法主義にすりかえられてしまっていて、結局、正しい信仰によって赦されることを見失っていた自分に気がついたのです。

**キリストを神の子と信じ、救い主として受け入れる時罪が赦されて救われるのか、それとも善行と立派な生活によって救われるのか、この二つの微妙な関係が私にはおいそれとは区別出来なかったのです。この二つに、はっきりとけじめをつけなかったり、善行を優先させたりしていたことが私自身の信仰の危機となって、私を脅かしていたことに初めて気がついたのです。しぼんでいた私の信仰は喜びに躍動する心に飛躍**

したのです。

では、どういう理由と順序で、神様は信仰によって私を「神の完全さ」にまで引き上げるようになさったのでしょうか？

私は旧約最大の預言者イザヤ書に惹きつけられた時、私の心はさらに喜びにおどりました。そしてこれは私にとって信仰上の大革命となったのです。

**“われわれはみな羊のように迷って、おのこの自分の道に向かって行った。主はわれわれすべての者の不義を、彼の上（ひとり子キリストの十字架の上）におかれた。”（イザヤ書 53：6 参照）**

ある神学者が言いました。仮に私たちが一日に一度、神の戒めや自分の良心に反することをし続けていると、一年間で365回、人の平均年齢を七十歳とした場合、普通の人の生涯には、最低二万五千回の罪をさばきの日まで積み上げていく勘定になります。

試験の日、神はどんなに愛であっても、この二万五千の罪を清算することなしにさばきの座にのぞむ人を寛大に見過ごすことは出来ないでしょう。なぜなら、天国はたった一つの罪すら侵入することは許さない「天の父の完全さ」を求められている場所なので

すから。そして前に申しましたように、神は今度こそ絶対に罪によって汚染させない完全な神の国をお建てになるご決心ですから。……これは当然なことなのです。

預言者イザヤがここで言っているのは、「神はわれわれの最低二万五千の罪と不義をみなことごとく、一点残らず、100%、キリストの十字架の上に置かれた。」のであります。

神の子イエス様をご自分の生命を身代わりとなさって全部引き受けられたのでした。

ですから二万五千のつみをことごとく一点残らずぬぐい去って下さるので、当然ゼロになってしまうわけです。キリスト教の言う贖罪がこれです。私たちの罪がことごとく神によって赦されゼロにされてはじめて、私たち人間は「神の完全さ」を取り戻すことができるのです。キリストが「天の父の完全さをいただきなさい」とおっしゃったのは、このイザヤの言葉を指していたのです。

そして新約聖書の中で、大使徒パウロは実に詳しくこのキリストの贖罪による救いを次のように見事にまとめられているのです。

“わたしたちは皆、キリストのさばきの座の前にあられ、善であれ悪であれ、自分の行ったことに応じて、それぞれ報いを受けねばならないからである。このようにわたしたちは、主の恐るべきことを知っているのので、人々に説き勧める。”（コリント人への第二の手紙 5: 10, 11）

どうしたらよいとパウロは「説き勧め」ているのでしょうか？

“だれでもキリストにあるならば、その人は新しく造られた者である。古いものは過ぎ去った、見よ、すべてが新しくなったのである。”（同 5: 17）

神の信仰によって、“新しき創造”とならねばならない。と、こう言ったのです。

どうしたらこの新しい創造となることが可能なのでしょうか？

“すべてこれらの事（新しき事）は、神から出ている。神はキリスト（の十字架）によって、わたしたちをご自分に和解（仲直り）させ、……すなわち、神はキリストにおいて世（世の罪人）をご自分に和解させ、その罪過の責任をこれに負わせることをしないで、…”（同 5: 18, 19）

何とありがたい嬉しい神のお約束、救いでしょうか？

使徒パウロはこの大啓示の文章を次のように結論しているのです。

**“そこで、キリストに代って願う、神の和解を受けなさい。神はわたしたちの罪（二万五千に達する罪）のために、罪を（全く）知らないかた（ひとり子イエス）を罪とされた。それは、わたしたちが、彼にあって神の（全き 100%の）義となるためなのである。”（同 5：20, 21）**

天地の神がご自分で私の罪を背負ってハリツケになって下さった！

私はこの神のお言葉に来るとき、いつも涙が一杯になって感謝するのです。

罪とは何を指しますか？造り主の神を忘れて神を無視し、神に独立を宣言して反逆した人の高ぶりです。

救いとは何ですか？自らの高慢に気づき、造り主の神に帰順して前非を悔い改めることによって、全く新しい“神と子供”の関係が成立するのです。

キリストが神の尊いみ位を捨て、地上の人の一人と

なられたのは、神と人、人と人との間に出来ているこの重大な障壁を取り除くためだったのです。(エペソ人への手紙 2 : 16-22 参照)

私たち人間はすべて、今生きている間にキリストによって自分の中にあるこの罪をゼロにしてもらわねばならないのです。

あの日、二千年前のエルサレムの小高い丘の上で、神の子キリストが無法な人々の手にかかって死なれたのは、実に私たちの二万五千以上の罪とがを完全無欠の神のご自身がすべて引き受けて下さるためだったのです。私どもが一度この神の愛を信じ受け入れる時、神は私どもがどんな間違いを犯した赦しがたい罪人であったとしても、100%完全な者としてごらんになり、天国に入る資格をお与えになって下さるのです。

神が人を義人とみなして下さって、「生命の書」にその人の名をおつけになって下さるのはこの時であって、善行を積み重ねて自他ともに立派なキリスト者になった後ではないのです。

この事実が私によく分かった時、私の心がどんなに喜びに高鳴ったことか、今でも決して忘れることは出来ません。これが神のお救いです。

## そこで最後の質問 —

神のこの優しき驚くべきお救いへのおそなえに対して、これを拒む者はどうなるのか？…にお答えいたしましょう。

新約聖書に出ている四十に達するキリストの例話の中の最大は“放蕩息子の悔い改めと帰還”であります。このたとえ話を読む時、私どもは自分の罪に気づいて悔いかえる人をどんなにか狂喜して喜び迎える優しい神の慈父の姿を見るのであります。

しかし、この例話の中に出てくる他の一人の人をけって忘れてはならないのです。

それは罪を認めて涙の中に帰ってきた弟を、きびしい、冷ややかな目で迎えた自称義人の兄なのであります。この兄は弟の悔い改めを疑い拒絶し、喜び舞い躍る父を痛烈に冷笑、批判し、家の扉を開いて歓迎の宴に同席を求める父に、自分の正義と父の不公平をとうとうと青筋を立ててまくしたてているのです。(ルカによる福音書 15 章の 15-32 節まで読んでください。)

“兄はおこって家にはいろいろとしなかつたので父が出てなだめると” —28 節に現われた描写によって、キリストがどんなに重大なことを教えようとしているのか、

きわめて明らかなのです。天国のお救いを逸するのは神によって締め出されるのではなくして、自分自身でお救いを拒絶するからです。私どもの多くは、この例話に現われた大っぴらな放蕩息子でないかもしれませんが。しかし、よく胸に手を当てて自省してみます時、案外“我ひとり聖し”的兄に該当し、このため神のお救いの招きに耳を傾けない者でないでしょうか。

ザアカイにやさしくみ声をかけ、かたくなな心を溶かし、罪の女に思いがけない許しを与えて更生させ、絶望して泣きわめく死刑囚に、パラダイスでのよみがえりの生命を約束して見事に救い上げたのはキリストだったのです。

しかし、この半面、人間的感性を失ってキリストの行動を誤解、曲解、付きまとって彼を非難し、居丈高になって不幸な人々の罪を責め自らの功績を数えたる傲慢なパリサイの徒、学者たちにキリストは声をあげて、

“へびよ、まむしの子らよ、どうして地獄の刑罰を逃れることができようか。”（マタイによる福音書 23：31-34 参照）と仰せになったのです。聖書に現われた神はこんなお方であるのを知る時、私どもはありがたき、しかし、恐るべき愛と義の神をみるのです。

無知であるがため無関心であるのか、あるいは知りつつなお、兄のように、神の愛を拒み続けるのか、そのどちらであっても、神のキリストの十字架によるお救いを逸する者の運命は、神からの離反、暗黒の滅びから逃れ得ないのです。

“神の子を踏みつけ、自分がきよめられた契約の血を汚れたものとし、さらに恵みの御霊を侮る者は、どんなにか重い刑罰に価することであろう。……生ける神のみ手のうちに落ちるのは、恐ろしいことである。”（ヘブル人への手紙 10：29-31 参照）

神のさばきはあります。しかも神はすべての人がこの試験にパスできるように救いの道をお備えになったのです。キリストの十字架がこれで、どんなに間違いを犯した人でも、この信仰一つによって、絶対的無罪放免にされるのであります。まるで嘘のような、しかし、全く信用してもいい神のすばらしい愛なのであります。

## 神のお恵み

こういう風にして、この罪深き人間を信仰によって義とされた神様は、今度はその人に聖霊をお与えになるのです。

聖霊という神様ご自身が、私たち人間の中にお働き

かけて下さるので、私たちはさらに感謝の上に感謝の心が起こって、今度はキリストなる神様を心から愛するようになるのです。

愛とは本当に不思議な力を持っているもので、それまでの私の強情な心が全く砕かれ従順とならせてくださり、そむき通していた神の戒めに喜び服従するようになってゆくのです。これを「聖霊の実」と言います。(ガラテヤ人への手紙 5 : 22, 23 参照)

私の努力ではありません。神の慈しみです。(エペソ人への手紙 2 : 1-10 を読んで下さい。)

そしてやがてキリストが天の雲にのって、さばきと、新天地建設のためおいでになる時、私どもは喜び勇んで天国の門をくぐっていくことが出来るのです。ヨハネが幻の中で見た天国の門をくぐった人々は、実に信仰によって義人に変えられた人の群れだったのです。信仰というものは不思議な奇跡を私どもにしてくれるのです。聖書のことばでこれを「信仰による義」と言います。

私にひとたびこの福音の神髄が理解された時、私の信仰に全き革命が起こったのです。それまでは大変不確かでいいかげんであった私の神への信仰は、不動の絶対革新のものとなったのです。どんなことが起こっても、も

う私のキリストを深く愛する信仰と感謝は微動だにしなくなりました。

もう一度くり返します。

「救い」とは私たち人間が一番恐れている生の不安と死からの解放なのです。神はひとり子、キリストを十字架にかけることによって、すべてこれを信じる者を死から永遠の生命に移して下さったのです。(ヨハネによる福音書 5 : 24 参照)

「確信」とは、死ななくてもいい、滅びなくてもいい、十字架上のキリストが私の罪のため犠牲になられたと信じることによって、この自信を今、私のものとすることを言います。さばきの日に分かるものではありません。今であることが大切です。聖書とは実にこの「確証」を、今日、ただ今、私たちに与えるため神から与えられた愛の手紙なのです。

ヨハネの第一の手紙 5 : 13 には、

**“これらのこと（聖書）をあなたがたに書きおくれたのは、神の子（イエス）の御名を信じるあなたがたに、永遠のいのちを持っていることを、悟らせるためである。” とあります。**

永遠のいのちを持っている — そうです。今持っている、信じる人に与えられているこの喜び！ なんと驚くべき神の救いのお恵みではありませんか！

すべての人生の善きことと喜びへの躍動は、この救いの確信から始まります。

どうかあなたも、あなたの愛するご家族とご一緒にこの救いへの確かさを、キリストを信じることにより、ご自分のものとしていただきたいと思います。

救いの確証 -リバイバルシリーズ-

---

※頒布価格 100 円

発行 令和 2 年 2 月 12 日

著者 麻生 茂

発行所 サンライズミニストリー

〒 905-0428

沖縄県国頭郡今帰仁村今泊 1471

電話 0980-56-2783

FAX 0980-56-2881

Email [info@sunriseministry.com](mailto:info@sunriseministry.com)

[www.sunriseministry.com](http://www.sunriseministry.com)

---

もっと詳しく研究なされたい方のために...



—各時代の大争闘—

## “歴史と聖書の預言”

定価（税込） ￥950

エレン・ホワイト 著

「各時代の大争闘」の再版！！

「各時代の大争闘」配布運動にあなたも参加しませんか。

カラーの写真、絵入りの、読みやすい新しいレイアウトです。

現代の真理の書籍中、最も重要なこの本を「至るところで秋の木の葉のように散らし」しましょう。あらゆる欺瞞の中にある現代人に正しい識別力を与え真の希望を与える必読の書。

お問い合わせ、お申込みは下記の連絡先まで

サンライズ ミニストリー

〒905-0428 沖縄県国頭郡今帰仁村字今泊1471

TEL (0980) 56-2783 FAX (0980) 56-2881

info@sunriseministry.com www.sunriseministry.com



# リバイバル小冊子シリーズ

---

No. 1 安息日問答

No. 2 アピール

No. 3 装身具について

No. 4 狭き道の旅

No. 5 リバイバルと改革

No. 6 神の聖安息日の遵守

No. 7 今

No. 8 終末時代における霊の賜物

No. 9 小さな光と大きな光

No. 10 預言の霊に関する指導原理

No. 11 サタンのわな

No. 12 人類が直面している世界情勢

No. 13 田舎の生活

No. 14 十戒

No. 15 主のぶどう園

No. 16 背教のアルファ

No. 17 終わりの時に備えよ

No. 18 どのようにして安息日を守るのか

No. 19 キリスト論

No. 20 救いの確証

No. 21 もうひとつの箱船

